読書　中国社会の実態をえぐる『中国人』　産経新聞-1983.10.10

サンケイ新聞　83. 10. 10　<第三種郵便物認可>

読書

新聞雑誌発生事情

興津 要著

明治維新による欧化の波にのって現れたあまたの新聞・雑誌の涙ぐましい歩みを、多くの秘話・逸話、多彩な登場人物で描く。花開く政論、官権の弾圧・干渉、注目の新職業としての新聞記者、読者を熱狂させる戯作ものなど、現代のマスコミのさきがけとなったドラマが生き生きと展開される。

（角川書店・八八〇円）

韓国社会をみつめて

黒田 勝弘著

共同通信のソウル特派員として活躍中の韓国通がまとめた日韓の文化・生活比較論的なエッセー。延世大学での語学留学時代も含めて、肌で感じた韓国人の思考と行動様式、社会と政治の風土を、鋭い観察の目でとらえている。日韓は、副題通り「似て非なるもの」だが、その異質さをみごとに浮き彫りにしている。

（亜紀書房・一三〇〇円）

ぶっくえんど

ソ連の言説と行動

大山 芳雄著

大韓航空機撃墜事件は、ソ連が平然として白を黒と主張する国であることを、改めて思い知らせてくれた。本書は「北方領土」をロシア固有の領土と強く改めたソ連の歴史観について、それが引用する

中国社会の実態をえぐる

中国人（上下）

F・バターフィールド著

「毛沢東思想」や文化大革命への思想的・イデオロギー的な共感の場としての中国は、うたかたのように消失した。だが、巨大な中国が社会主義をタテマエとする中華人民共和国として存在していることには変わりがない。たとすれば、そのような中国社会の実態をえぐり、徹底的に描き出すことをぬきにして、中国を語ることができようか。

このような思いが、本書を支えている一貫したライト・モチーフである。著者はこの狙いを実に見事に成功させているが、それは著者が若き日にハーバード大学でジョン・K・フェアバンク教授の薫陶を受け、革命後の北京で最初のアメリカ人特派員になろうとした持続的な意志によってもたらされたものである。この意味で著者は、同じフェアバンク門下のアメリカの著名なジャーナリスト、セオドア・ホワイト記者のジュニア版たともいえよう。

若き日に革命中国に理想と希望を託した著者が二年間の北京滞在（『ニューヨーク・タイムズ』北京支局長）で得たものは、「警察国家としての中国」の知られざる内面であった。中国には官製版の中国と隠された中国という「二つの中国がある」ことを身をもって知らされた著者は、北京の日常生活中の困難や不条理や策略、つまり中国人が「生き延びるための知恵」に大きく光を当てている。外国人への監視の厳しさ、身分社会・裏口社会の実情、売春婦体験、「はては性交すらも、いろいろな点で共産党の命令に服さねばならない」現実を、官僚主義、中国版強制収容所の実態とともに活写し、またジャーナリストとして体験した中国の情報・コミュニケーション構造の暗部をも記述している。しかもその中国は当分、今日のような鄧小平主導型の社会でありつづけるだろうと著者も興望しているがゆえに、中国の将来には救いがないのかもしれない。

昨年、全米図書賞を受賞して話題を集めた大冊の本書が、佐藤亮一氏という中国通のベテラン翻訳家の手によっていちはやく刊行されたことを喜びたいと思う。‖佐藤亮一訳

（時事通信社・各一六〇〇円）

東京外大教授　中嶋 嶺雄

その細き道

高樹 のぶ子著

高樹のぶ子さん

さきの芥川賞候補になった「追い風」をふくむ短編集で、三編を収めている

が、一筋貫いているものがある。それは、作者の「あとがき」の次の一節に明らかだろう。「友情や信頼、無償無私の行為といった、人間の美質がもたらす抗い

がたい力」を、作品の実現したい、と。

ただし、作者は、現いう険しい時代にあっ

複雑に

あがくようにしていて男女の姿を中心に捉えである。そして、その結びつきのうちに、く輝くものを、さぐす。同時に、この美くものが、かえって

実録　占領下の

今井 一男著

昭和二十二年の「二・一ゼスト」の前後のことである。次官会議のメンバーが「総理の政治力により社会党を抱きこみ連立内閣をつくれ」と吉田首相の決起を促した。連立工作に失敗した吉田は二・一ストに関して事前にマッカーサーとの間に話をつけていたので、スト直前に閣僚が鳩首協議をしていてもキチンと大蔵の自宅に帰ってしまう。スト中止命令の直後、吉田は不祥事件の責任をとって各

とっ

省次官の辞職を要求。大蔵省では大平正芳、池田勇人局長に「もが次官になったら、」

来最悪の大蔵次官に思いとどまったがい直言した。

このような秘話を者は、戦後、大蔵省貯蓄局長と給与局長た。本書は著者が一

奈良・浮御堂の雨＝本書から